

立木香都子

わたしの写真館



わたしの写真館

立木香都子



わたしの写真館

定 価 850円

発 行 昭和55年4月20日 第1刷発行

著 者 立木香都子

© Katuko Tatuki 1980

発行者 藤根井 和夫

発行所 日本放送出版協会

東京都渋谷区宇田川町41-1

印刷所 株式会社 享有堂

製 本 株式会社 石津製本所

検印廃止

落丁・乱丁本はお取替えいたします

わたしの写真館・目次

記憶のアルバム 7

わたしの春 20

トンネルはいつまでも続かない 34

前へ前へ 46

立木サロン 61

光と彩 67

晴れを写す 80

クレームこそわが師 95

イブたち 105

万華鏡 111

道 133

写真昔ばなし 139

着物の様式美をもとめて 158

ほほ笑み 177

白の幻想 189

「香都子さん」から「なっちゃん」へ

——「なっちゃんの写真館」誕生余話——

あとがき 221

装
幀
三
田
恭
子

わたしの写真館

わたしは乃富^{のふ}ちゃんといわれて育ち、今また、
なっちゃんとよばれている、このふしぎさ――。

記憶のアルバム

麦の穂がうれるころ、南国阿波に南風が吹く。暖かいこの風が吹きはじめると、きまppingて、灯がともるように、ぼうつと思ひ出す光景がある。

色は白。明るい光りがさあつとさして、その光りの中には、白い花につつまれた、白い顔がねむっている。あたりに人がいるようであったが、それはその画面に入ってはこない。ただ、白い花にかこまれて眠っている人の顔と、その情景だけがうかんでくる。

「乃富ちゃん、お母さんにさよならしなはれ」

この情景と同時に、はっきりとこの声がきこえてくる。

私はもう何十回も、古いアルバムをめくるようにこの映像を見てきたが、これは私が二歳のとき、母に別れたときの記憶であった。母の映像は、白色の中に、白く光り、やわらかい感触で私の目にやきついている。

幼くて別離の悲しさはわからなかったが、母との一期^{いちご}の別れは、二歳の心にも強く残ったのであろう、いまでも鮮やかにうかんでくる。

この話をするとき、

「ふたあつの子が、ほんなこと、おぼえとるかいな」

とふしぎがるが、いま私が写真家としてライティングする目で見ると、母の顔にさしていた光りは逆光で、私は丈の高い人に抱かれて、斜め上から見ていたと思うのである。花は百合の花で、敷布の白と百合の花の白と、母の顔の色が、その逆光の中ではっきりとちがった白さに見えている。

こんなことが、自分でわかるのだから、私はこの記憶はまちがいなく私のもので、誰かに教えられたり、作り出したものでなく、自分の目で見て記憶しているものだと思っている。私の記憶は、この母との別れからはじまった。

私の生れは阿波の徳島。最近、阿波おどりで有名になったところである。

徳島の町は、吉野川がつくった三角州にひらけた町で、眉山^{びざん}とよぶならかな曲線をもった山のふもとにひろがっている。私はその眉山がすぐ目の前に見える紺屋町で生れた。大正四年のことである。

私のうちは、ご先祖が阿波の初代の殿さまについて東海地方からやって来たといわれて



祖父・信造（大正末期写す）

いて、元禄六年以来、御典医として仕え、代々医者としていた。写真館をはじめたのは祖父信造で、明治十六年に立木写真館を創業している。関東の方はどういうわけか、タチキ写真館とよんでくださるが、先祖伝来タツキでござるという、その立木の信造が医者にならず写真師になったのである。当時は、時代の先端をゆく職業であった。そのころは種板（ネガ）^{たねいた}として乾板でなく湿板を使っていたところで、技術的にも苦勞したようである。祖父はなかなかの事業家で県や学校の仕事をするようになり、明治三十年には、明治天皇

御真影の複写をうけたまわっている。謹んで複写し申し上げたと、

これは父からきいた。

「あなたのお祖父さん、白いヒゲをはやしておいでたぞな」

と、祖父をおぼえていくくださる方はいう。祖父はヒゲが我慢できなかった。私がおぼえている祖父は時折スタジオへ現れ、従業員を指図していたが、大先生が見えた

いうと皆、緊張してかたくなっていた。悠然として威厳のあった人である。私が手をひいてもらうと、右手の指が二本なかった。

「じいさん、指、どないしたん」

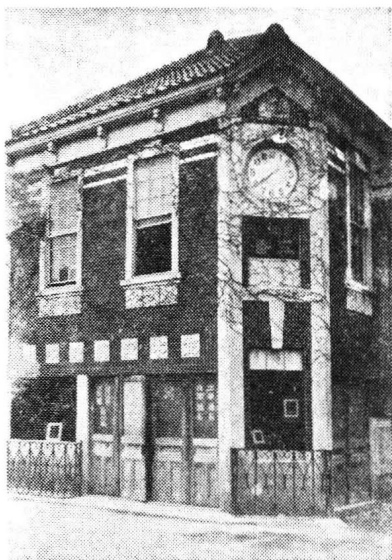
と、私は何度かたずねかけたが、指のないことをきいたら、じいさんがつらいかもしれないと思つてはやめた。後年、父にきいたところでは、若いころマッチ工場を経営していた事故で失ったという。

祖父は私の頭をなでて、

「乃富子が写真をうつすころは、もっともつとええ機械ができて、ええ写真がとれるじゃろうな。いま目で見とるように、色のついた写真がとれるようになるかもしれんぞ」

祖父は私が写真を撮るものと信じ、私のうつした写真を見たいという気がしていたのである。そのころ、二代目の私の父は写真に従業員まかせにして、政治に走り、市議会に出たりしていたので、写真がないがしろになっていた。それが祖父にはさびしかったのかもしれない。幼い孫に、希望をつないでいたようである。

春になると阿波の野にはお遍路さんが通る。四国八十八か所の札所をめぐるお遍路さんは、菜の花の咲く道を菅笠をかたむけ、鈴かねをならして通りすぎてゆく。このお遍路さんのすがたを見るころから、立木写真館の赤いレンガを這うつた鳶が少しずつ活気もち、緑の色



戦災にあうまでの社屋（西側より写す）

をもちはじめた。私はこの蔦が芽ぶき、日まじに緑の色がましてゆくところが好きで、外に立ってよく眺めたものである。

このマンサード式の建物は祖父が明治の終りごろに建てたもので、当時としてはなかなかモダンであった。

「立木のあの赤いレンガに蔦が這うて、きれいであったナ、戦前の徳島では珍しかったわ。とても、モダンでしゃれていたもの」

と、つい最近もある人にいわれた。まだまだ昔の赤レンガをおぼえていてくださる方がいる。しかしこの建物も昭和二十年七月、戦災にあって焼けおちた。

「わたしが紺屋町を通りよったらナ、立木の窓からピアノを入れよったんヨ。あんたのピアノだろう、あのころピアノは普通の家でもつとらなんだナ」

ピアノは私のものごころがついたときからあった。大正の中期である。そのころピアノをつりあげているのを見た人がいるので私はおどろいた。

立木の赤レンガの写真館がこうして町のかたがたの目に親しまれ、営業させていただいて今年で九十八年になる。

創業者の祖父は大正十年、私が七歳のときに死んだ。創業から三十九年目であった。父が跡を継ぎ二代目、そのあとを私の主人がうけ継いで三代目、その亡きあと、長男の利治（とほろ）が四代目である。

明治三十年日清戦争のあとの景気のよくなった時代に、うちのすぐ近くに腕のいい写真師が開業した。いい写真をうつして花街の女性の人気をあつめている。それを見た父は、「これは負けられん、親父に代ってわしが」とのり出し、中学を断念して写真の修業に入った。十五歳の時である。以来、夏には毎年東京で修業したが、日露戦争がはじまった明治三十七年には、香川県善通寺に支店を開くことになった。善通寺には師団があるので、出征する人は善通寺に集まって、そこから出てゆく。その兵隊さんの写真をうつすのである。レンズをのぞき、もう帰って来ん人かもしれないと思うと、一人一人祈るような気持ちでシャッターを切った、と父が語っていたが、後年私も同じ思いを経験することになる。

父は日露戦争が終った翌三十九年、アメリカへ写真武者修業に出かけていった。アメリ

カでは修整や印画仕上げで稼いで、イリノイス写真学校に学び、ライティング、プリント、閃光、カーボンの課程を六か月で習得している。そこから、ニューヨークに行き、ヨーロッパをまわってくる予定にしていたが、そのころ皇太子殿下であらせられた大正天皇が徳島県へ行啓ぎょうけいになった。そのとき御宿泊所として城山の下に千秋閣が建った。昔から藩の滴てき翠閣すいがあつたが、建物が古いというので新築したようである。

この行啓の皇太子殿下撮影の御用を、立木が承つたのである。それを聞いた父は予定を打ち切つていそいで帰つてきた。千秋閣が建ちはじめたころアメリカを出て、船で帰りついた時は完成間近い時であつたという。私のまだ生れていない時の話で、この行動力は父も自慢にしていた。正規に学んだ写真の腕はたしかにいいものであつたが、活気がありすぎて、じつとしていられない性質である。せまい徳島の町で写真をうつすだけでは「たいくつ」でしかたがない。そこで市会に出馬した。父は説得力のある人で、自分の説得に人が応じることがおもしろくてしかたがなかったようである。大正六年初出馬で市会議員になった。

写真に政治にと、自分のもっている能力をフルに生かしていた父であつたが、幼な児を残して妻に死なれ、再度むかえた妻にも六年後に死なれて三度目の妻をむかえた。妻に死別した父は、夫としては不幸せな人であつたのかもしれないが、三人目の妻は、よく父に

仕えて父の死を看とってくれた。父に三人の妻がいたことは私に三人の母がいたことで、私は三人目の母に育てられ、私が子供を生んでからもこの母に助けられて仕事をつづけてきた。

他人は、三人も母が変わってと同情してくれるのだが、私は「よその人はお母さんが一人しかおれへんのに、わたしや三人もお母さんのおつて得しとる」と思っていた。

三人目の母が来たのは、前の母が死んで一年近くたった寒い日で、母はどういうわけか一人で人力車に乗って来た。土佐の医者の娘で、一度嫁いだとのこと、再婚である。九つであった私は、今度来るお母さんに全身で神経をたてていた。

「乃富ちゃん」

と、母は私をよんだ。その声の温かさと、やさしい目つき、子供ごころに、この人はいい人だと即座に判断した。子供のカンであったが、その時の私のカンははずれていなかった。母は本当にいい人であった。

母がうちへ来たところは、父が家業をかえり見ず、政治に夢中になっているところで、家中は経済的にたいへんな危機であった。前の母が明るく派手な人であったので、家計はふくらまるだけふくらんでいて、破裂寸前の状態であったが、子供の私にはわかるはずもなかった。母は来た日から節約、節約で家計をたて直そうとし、大勢の従業員をひきしめて